# 菊廼屋真恵美年譜稿

青山英正

## 一　はじめに

菊廼屋真恵美は、鹿都部真顔門の狂歌師である。寛政七年（一七九五）生まれ、嘉永三年（一八五〇）七月二十六日没。享年五十六。墓所、京都黒谷金戒光明寺。姓、島田。名、初め田之助、のち周忠、隠居後宗二。通称、八郎左衛門。屋号、恵比須屋（蛭子屋・夷屋・戎屋などとも表記）。狂名、菊廼屋（菊廼舎・菊之舎とも表記）、また、初め延年、文政二年（一八一九）以降真恵美（真慧美・真衛美とも表記）と名乗り、同六年までの間に真顔から鹿都部の号を譲られた。法号、錦華齋禀誉菊翁宗二居士。

近世前期から近代初期にかけての京都を拠点として、三都で呉服商、両替商などを幅広く営んだ豪商恵比須屋島田八郎左衛門家の八代目（文政二年襲名）にして、狂歌師としては四方側に属し、真顔撰『俳諧歌鮮衣集』（文政六年〈一八二三〉頃刊）に判者として名を連ねた。真顔没後、大津の秋廼屋颯々とともに『四方歌垣翁追善玉比古集』（同十二年〈一八二九〉刊）を編み、また『狂歌百鬼夜興』（同十三年〈一八三〇〉刊）の編著がある。

『平安人物志』には文政十三年版および天保九年（一八三八）版の、いずれも文雅の部に掲載されている。前者には、

嶋真衛美　号菊廼舎　両替町三条北　嶋田八郎兵衛（ママ）

とあり、後者には、

嶋真美　号菊之舎　両替町三条北　嶋田八郎左衛門

と記されている。

この島田八郎左衛門家の別家に当たるのが、京都の本居宣長門人として知られる城戸千楯である。真恵美が、千楯の主宰する京都鈴門の和学サークル鐸舎（ぬてのや）に文政九年（一八二六）から参加し、同十三年に本居大平に入門したのは、おそらくこの縁による。なお、鐸舎の活動においては周忠を名乗っているが、本稿では便宜上、呼称を真恵美に統一する。

真恵美は、『思斉漫録』（天保三年〈一八三二〉）など教訓的な著作を残した京都の儒者中村弘毅の門人でもあった。弘毅の随筆『閑度雑談』（嘉永元年〈一八四八〉序刊）に真恵美が寄せた序文には、自ら「門人　嶋田周忠」と記している。弘毅の学問は、真恵美の言葉を借りれば、「人の人となるべき有用の学」（『閑度雑談』序）であり、要するに儒教に基づいた日常の倫理を説いたものであった。

城戸千楯の学問も、同時代の平田篤胤のように観念的、思弁的なものではなく、歌文の制作と古典の考証が中心であったことを考えれば、真恵美は、商人としての分を守り、狂歌に興じつつ、和漢の教養を身につけるべく穏健、堅実な学問に努めた人物であったと言えよう。そして、学問や文芸に対するこうした姿勢は、近世後期における京都富

裕商人の、一つの典型を示すものと思われる。

本稿は、近世後期における上方和学と狂歌壇との結びつきの一端を明らかにする手掛かりとして、この菊廼屋真恵美について、これまで管見に入った情報を年譜の形で整理するものである。

## 二　島田八郎左衛門家および真恵美の八代目襲名について

前述の通り、島田八郎左衛門は、京都を拠点として三都で呉服商、両替商などを幅広く営んだ豪商である。島田八郎左衛門家については、すでに宮本又次が商業史の観点から論じ(1)、筆者も、同家過去帳に記載されている人物の同定を試みた上で、本草書『花彙』草之巻一・二（宝暦九年〈一七五九〉刊）を編纂した島田充房（生年不詳～天明二年〈一七八二〉）に光を当てた。そして、充房が同書を出版した背景に、宝暦・明和期における物産会の流行と、その物産会に珍しい魚介類や金石、古瓦などの収集品を数多く出品できた島田家の財力、および舅である儒医香川修庵とその門下のネットワーク、書肆永田調兵衛といった物産会会友との人間関係、そして島田家別家の書肆大路儀右衛門等恵比須屋一統との結びつきがあったことなどを明らかにした(2)。

充房から真恵美までの間、すなわち天明から文政までの間にも、同家の文化活動が継続していた様子はうかがえ、有栖川宮織仁親王の歌道入門者に、「文化元年一月二十四日　島田与三右衛門　夷子屋」とあるのは(3)、三代島田与三右衛門房衆（生年不詳～文政七年〈一八二四〉）にほかなるまい。

なお、文化十二年（一八一五）十月二十四日、この与三右衛門房衆は、自らの相続人を「従弟金蔵事八郎左衛門」から娘たひに変更した上で(4)、さっそく同月、家屋敷をたひに譲って隠居するのだが(5)、その証文に証人として署名している「新町通蛸薬師下ル町島田八郎左衛門」とは、前名金蔵こと七代八郎左衛門長房（生年不詳～天保四年〈一八三三〉）のことである。

真恵美が八郎左衛門を襲名したのは、文政二年（一八一九）閏四月二十六日のことであった（国立国会図書館蔵『沽

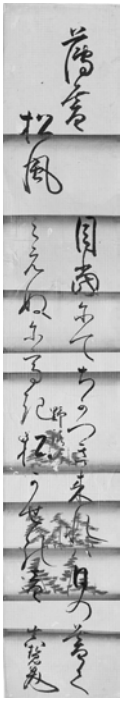
券帖』八〇七－六五）。そして、三井文庫所蔵の『文政四年巳九月宗門人別改帳　両替町』（続六四三二－一）に記載されている八郎左衛門は、それに続けて「妻ため」「娘たゑ」といった真恵美の家族の名が記されていることから、八代目すなわち真恵美その人に間違いない。次節で触れるように、真恵美は文政二年（一八一九）、江戸に下って狂名を延年から真恵美と改めているが、その江戸出府は八代目八郎左衛門襲名に伴うものであったと考えられる。

## 三　真恵美の文芸活動と交友

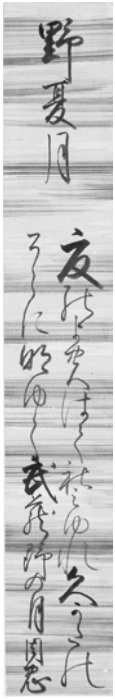
今述べたように、真恵美の名の初出は、文政二年である。すでに牧野悟資が指摘している通り、同年の四方側月並集『俳諧歌貴賤百首』に「延年改真恵美」「京都　真恵美」とあり、ここから前の狂名が延年であったこともわかる(6)。そうだとすると、同年の五側月並集である石川雅望撰『狂歌笛竹集』巻上に、「人の家の小柴垣にうのはなさきかゝりたり」という題で入集している「菊の屋延年」や(7)、同年の雅望撰『狂歌三都名所図会』に載る「菊のや延年」も真恵美その人であると考えられる。実際、その『狂歌笛竹集』巻下には、「北山に松茸とりにゆきたりけるに」という題で「菊の屋真恵美」の名が見える。次節の年譜からもうかがえるように、真恵美は四方側のみならず、石川雅望の五側とも関係が深かったのである。

なお、「人の家の小柴垣にうのはなさきかゝりたり」は初夏の、「北山に松茸とりにゆきたりけるに」は晩秋の題と考えられ、前者の題で入集した「菊の屋延年」にも、後者の題で入集した「菊の屋真恵美」にも所付がない。すなわち、真恵美は、文政二年の八郎左衛門襲名に伴い、初夏から晩秋にかけて江戸に滞在し、その間におそらく真顔から「真」の字を与えられて延年から真恵美へと改名し（「恵美」は屋号の恵比須屋から取ったか）、その年の内に帰京したことになる。

その後、文政六年までの間に真顔から鹿都部の号を譲り受けたことは、小林ふみ子が指摘している(8)。そして、文政から天保にかけて、四方側を中心に多くの狂歌撰集に入集し、時に判者も務めた。管見の限り、所付はほとんどが



神谷勝広氏所蔵菊廼屋真恵美短冊（署名「真慧美」）



筆者架蔵菊廼屋真恵美短冊（署名「周忠」）

京都であるが、商売上の関係でたびたび江戸に下っていたらしいことは、天保三年（一八三二）十一月三日伊東颯々宛城戸千楯書簡や、『慊堂日暦』天保十二年三月三日・同十三年十月十五日条などからうかがえる。

交友関係を見てみると、狂歌集を見る限り、玉兎園寸美丸、白菊亭長谷川数照、秋廼屋颯々、橘庵蘆辺田鶴丸、呑舟斎笹山呉厓あたりと近しかったようだ。和学方面においては、城戸千楯や本居大平はもちろんのこと、一時期鐸舎を預かった村田春門とも相識であった。その他、商売上の関係もあった竹川竹斎や儒者の松崎慊堂とも交流のあったことが、彼らの日記から知られる。

真恵美には収集家としての一面も垣間見え、大橋長広編『鈴屋大人五十回霊祭歌』（嘉永三年〈一八五〇〉刊）の附録として刊行された『鈴屋翁真蹟縮図』に、「嶋田氏蔵」として、荷田春満の懐紙、賀茂真淵の短冊や消息、契沖の消息を出品しているが、これらは真恵美の収集品と考えてよいだろう。なお、真恵美の次男である弥三郎義忠（号連真、文政七年～明治十九年〈一八二四～一八八六〉）が京都妙蓮寺に寄進した『松尾社一切経』は、これを調査した中尾堯によればいずれも優品とのことで、中尾は、「弥三郎が古写経に精通し、蒐集家としての一面を持っていた」と述べている(9)。先述したように、島田家からは、宝暦・明和期の物産会に本草関係の収集品を数多く出品した充房のような人物が輩出しており、その延長線上に真恵美や義忠の営為を位置づけることができよう。

# 四　菊廼屋真恵美年譜稿

## 凡例

- 真恵美に関する事項は〇で、関連事項は△で、推定の根拠などの補足説明を※で示し、適宜それぞれの後に関連資料の引用を掲げた。
- 引用は、原則として追い込みとしたが、必要に応じて「／」で改行を示した。また、私に句読点・濁点を補い、旧字体を新字体に改めるなど表記を変えた箇所がある。

**寛政七年（一七九五）乙卯　一歳**

※生年について

①『藤垣内門人姓名録』に、文政十三年（一八三〇）の入門時に三十六歳と記されていること（→文政十三年三月十六日）、②島田家の菩提寺である京都金戒光明寺の島田家墓碑銘、および同寺の宿坊西住院の戸川隆博氏からご教示いただいた島田家過去帳から、嘉永三年（一八五〇）七月二十六日没であると判明し、③同四年に真恵美の子弥三郎義忠が、真恵美の一周忌に当たり京都妙蓮寺に寄進した「聖教御櫃」、すなわち経典を入れる長持蓋裏の貼紙墨書「嶋田弥三郎聖教寄進長持銘」に、真恵美の享年が五十六と記されていること(10)から、寛政七年の出生であることは疑いない。

※ちなみに、蘆辺田鶴丸は宝暦九年（一七五九）、城戸千楯は安永七年（一七七八）、玉兎園寸美丸は天明七年（一七八七）の生まれであった。

**文政二年（一八一九）己卯　二十五歳**

〇閏四月二十六日　島田八郎左衛門を襲名。

「前書之家屋敷、我等所持仕来候処、此度右家屋敷并名前印形共其許江相譲申候。（中略）／文政卯年壬四月廿六日　譲

主　嶋田八郎左衛門事／宗一（印）／煩ニ付／（中略）田之助事嶋田八郎左衛門殿」。
（国立国会図書館蔵『沽券帖』八〇七－六五）

○石川雅望撰『狂歌三都名所図会』に入集か。「菊のや延年」。
○同『狂歌笛竹集』に入集。「菊の屋延年」「菊の屋真恵美」。
○四方真顔撰『俳諧歌貴賤百首』に入集。「京都　真恵美」「延年改真恵美」。
○同『俳諧歌相撲長』に入集。「京　真恵美」。
※文政二年以前から、おそらく「延年」などの狂名で活動していたものと思われるが、いつ頃から狂歌を始めたのかについては未詳。

**文政三年（一八二〇）庚辰　二十六歳**

○石川雅望撰『新居狂歌合』に入集。「京　菊の屋真恵美」。

**文政四年（一八二一）辛巳　二十七歳**

○石川雅望撰『新曲撰狂歌集』に入集。「京　菊の屋真恵美」。
○九月　『文政四年巳九月宗門人別改帳　両替町』
「一　代々浄土宗　金戒光明寺中／西住院旦那／御貸地拝借／御為替御用達／嶋田八郎左衛門／右同断　妻ため／右同断　娘たゑ（以下略）」。
（三井文庫蔵、続六四三一－一）

**文政五年（一八二二）壬午　二十八歳**

○森羅亭万象（七珍万宝）撰『俳諧歌職人画讃合』に入集。「京都　真恵美」。
○四方真顔撰『俳諧歌着到百首』に入集。「京　真恵美」。

**文政六年（一八二三）癸未　二十九歳**

○臥竜園梅麿・石川雅望・四方真顔撰『まがきのきく』（二世朱楽館菊麿追善）に入集。「菊廼屋真恵美」。

○四方真顔撰『俳諧歌鮮衣集』に入集。「京　真恵美」。巻五で「菊廼屋」として判者を務める。
○文政二年からこの年までの間に、四方真顔から鹿都部姓を譲られる。
「若かりし程、狂歌よむ作名にしたる鹿津部といふ姓を菊廼屋のあるじの譲うけばやとあるに、やがてまゐらすとて

四方歌垣
真顔
夏野ゆくをしからずおもふ鹿津部をほしげに見ゆる君にゆづらむ

菊廼屋
鹿津部真恵美
人みなと競狩していけ取し鹿津部の名は千年にもがな
真恵美ぬし鹿都部の号をゆづられたるを祝して
蜀山人
俳諧の歌垣ちかく鹿津部の真恵美さかえてたどる奥山」

（柳々居辰斎画一枚刷り、スイス・リートベルグ美術館寄託 Lucy Collection）(11)

**文政九年（一八二六）丙戌　三十二歳**

○五月二十七日　初めて鐸舎の月並会に出席する。
「鐸舎月並会凡二十輩ノ内、今井国香・島田周忠・福井芳秀・右初て来会」。
（『村田春門日記』、『渡辺刀水集』三、青裳堂書店、一九八七年、一九六頁）。
○石川雅望撰『蓮華台』（徳成の父の追善）に入集か。「菊の屋真笑」。

**文政十年（一八二七）丁亥　三十三歳**

○二月八日　城戸千楯、村田春門らを自宅に招く。

「夕方夷屋真恵美方へ被ㇾ招、先は茶湯めかしき事にてあるじせられたり、人丸像近来得候とて拝したり、見事なる木像なり、凡五六寸ばかり也、歌を望に付よみて帰、満興也、四ツ時過歟、千楯・並樹・春友・予」。
（『村田春門日記』、『渡辺刀水集』三、二三八頁）。

○橘庵田鶴丸蔵版『俳諧歌五日角觝立』に入集。「菊の屋」「真恵美」。そのうちの一会（八月）で撰者を務める（国会図書館蔵『菊廼屋五日角觝立』、『狂歌寄浪』六所収）。

○西村千頴撰『新玉帖』に入集。「京菊廼屋真恵美」。

**文政十一年（一八二八）戊子　三十四歳**

○四方真顔撰『四方廼巴流』で判者を務める。

**文政十二年（一八二九）己丑　三十五歳**

○三月二十一日　江戸大火。尾張町の恵比須屋全焼。

「尾張町、布袋屋、恵比須屋不ㇾ残焼」。（『甲子夜話』続編二、平凡社、一九七九年、二八一頁）。

○春　玉兎園寸美丸編、安穴大人・橘庵田鶴丸・聴風軒草浪・九日庵撰『狂詠都名物集』下巻見返しに識語を寄せる。

△六月六日　四方真顔没。

○真顔追悼の狂歌集『俳諧歌歌場老師追福三題集』が刊行される。真恵美は出詠せず。

※真顔追善の流れと真顔死没前後の四方側に生じた軋轢については、高橋章則「『故俳諧歌場真顔居士追福香花集』広告二種――真顔没後の四方側」（『書物・出版と社会変容』第十三号、二〇一二年十月）を参照。

○菊廼屋真恵美・秋廼屋颯々撰『四方歌垣翁追善玉比古集』を刊行する。

**文政十三年＝天保元年（一八三〇）庚寅　三十六歳**

○三月十六日　本居大平に入門する。

「三月十六日京　嶋田八郎左ヱ門源真恵美三十六歳」。
（『藤垣内門人姓名録』東京大学文学部国文学研究室本居文庫蔵、『三重県史』資料編近世五、一九九四年、一〇

二八頁）。

※本居大平『秋草』（同文庫蔵、本居・家一二八／国文七、国文学研究資料館マイクロフィルムによる）に、「嶋田八郎左衛門真恵美入門、はじめ詠草寄道祝といふ題にて、ふみそめてひろひてもがなことのはの玉もありてふわかの浦道、とある。かへし、わかのうらのなみ〳〵ならず見るまでにみがきてよせよことの葉の玉」とある。

○三月二十八日　橘庵田鶴丸・番匠亭墨縄・玉兎園寸美丸・髭廼屋鰕丸・万喜亭亀雄・九淵舎湖丈・杯月舎満丸撰『都曲七絃集』の序文を執筆する。「きくのやのあるじ真恵美／弥生末の八日」。

△閏三月二十四日　石川雅望没。

○四月　真顔一周忌追悼会の公示広告「故俳諧歌場真顔居士一周忌追福香花集」に、「同盟判者」の一人として掲載。「菊廼屋真恵美」。（個人蔵、前掲高橋章則論文から重引）。

○十月　『平安人物志』文政十三年版文雅の部に掲載される。「嶋真衛美（号菊廼舎　両替町三条北）　嶋田八郎兵衛（ママ）」。

△冬　真顔一周忌追善の森羅亭万象・弥生庵雛丸撰『俳諧歌追福香花集』が刊行される。真恵美は出詠せず。

○『狂歌百鬼夜興』（刊年は見返しに「庚寅新鐫」とあるのによる。文政十二年十一月四日城戸千楯序・玉兎園寸美丸跋）を編輯、刊行する。

「菊廼屋真恵美しるす」（詞書末）、「催主　菊廼屋」（巻末）、「輯者　菊農屋」（奥付）。

## 文政年間

○四方真顔編『俳諧歌出情百首』に入集。「京　真恵美」。

○同『俳諧歌堀河太郎百首』に入集。「京　真恵美」。

○同『俳諧歌源氏小鑑』に入集。「真恵美」。

○同『俳諧歌次郎万首かへりあるじ』に入集。「京　真恵美」。

## 天保二年（一八三一）辛卯　三十七歳

○春　橘庵田鶴丸編『春興立花集』に入集。「菊の屋」「真慧美」。

○十二月　白菊亭長谷川数照編、臥竜園楳麻呂・万栄亭亀麻呂・玉兎園澄麻呂・橘庵田鶴麻呂撰『狂歌蘭亭帖』で、「当座　菊」の判者を務める。

**天保三年（一八三二）壬辰　三十八歳**

○十一月末頃　江戸から帰京する。

「一、主人真恵美義も、当月末ニ者江戸より帰京被致様子ニ御座候」。

（十一月三日付伊東颯々宛城戸千楯書簡、拙稿「伊東颯々宛城戸千楯書簡三十八通――翻刻と解題」、『明星大学研究紀要　人文学部日本文化学科』第二十号、二〇一二年三月）。

**天保四年（一八三三）癸巳　三十九歳**

△九月十一日　本居大平没。

○十二月十三日　本居大平の追慕会に出詠。

「嶋田真恵美／もみぢばはまた見ん秋も有物を君はいかなる風かさそひし」。

（『天保四年十二月十三日秋哀傷亡父追慕会』東京大学文学部国文学研究室本居文庫蔵、本居・家二五〇／国文八〇〇、国文学研究資料館マイクロフィルムによる）。

**天保六年（一八三五）乙未　四十一歳**

○六月十九日　冨山長知が真恵美所蔵の『古今和歌集』で校合をおこなう。

「文政十一年子正月十九日校合　嘉延／天保六年未六月十九日嶋田真恵美主之以本書入畢冨山長知／同年未十一月十五日猶又城戸千楯主之以本再校畢」（第一冊奥書）。

「文政十一年戊子正月廿一日校合全功成　嘉延／天保六年未六月廿一日嶋田真恵美主之以本書入畢冨山長知／同年未十一月廿日猶又千楯主之以本再校畢」（第二冊奥書）。

（宮内庁書陵部蔵『古今和歌集』鷹司本、鷹－三六五、二冊、安永八年刊・文政四年修）。

※冨山長知は鐸舎社中の人。『諸社奉納歌集』下鴨社之部（天保七年跋刊）に、「冨山源之助／藤原長知」とある。

○閏七月二十三日　『諸社奉納歌集』下鴨社之部（天保六年二月城戸千楯序、同年閏七月二十三日奉納、同七年四月一日長谷川清秋跋、鐸舎社中蔵刊）に「鐸舎社中之内詠人」として出詠。「嶋田八郎左衛門／源周忠」。

○八月二十八日　『諸社奉納歌集』上賀茂之部（天保六年四月福井芳秀序、同八月二十八日奉納、同八年二月桂有彰跋、鐸舎社中蔵刊）に「鐸舎社中之内詠人」として出詠。「島田八郎左ヱ門／源周忠」。

○九月　本居大平の三回忌に出詠。

「真恵美／積置しふみの山路や分入らんむかしの人を尋がてらに」。

（『三回忌の歌』東京大学文学部国文学研究室本居文庫蔵、本居・家二四九／国文七二四）。

○九月　『諸社奉納歌集』松尾社之部（天保六年十一月十五日奉納、同九年三月尾崎正明跋、鐸舎社中蔵刊）の序文を執筆する。「天保六年九月　源周忠」。

△十月六日　橘庵田鶴丸没、

○十一月十五日　『諸社奉納歌集』松尾社之部（天保六年九月真恵美序、同年十一月十五日奉納、同九年三月尾崎正明跋、鐸舎社中蔵刊）に「鐸舎社中之内詠人」として出詠。「嶋田八郎左ヱ門／源周忠」。

**天保七年（一八三六）丙申　四十二歳**

○三月四日　『諸社奉納歌集』梅宮社之部（天保七年春畑中重稔序、同年三月四日奉納、天保九年二月三十日早川真学跋、鐸舎社中蔵刊）に「鐸舎社中之内詠人」として出詠。「嶋田八郎左衛門／源周忠」。

**天保九年（一八三八）戊戌　四十四歳**

○五月　『平安人物志』天保九年版文雅の部に掲載される。「嶋真美　号菊之舎　両替町三条北　嶋田八郎左衛門」。

**天保十二年（一八四一）辛丑　四十七歳**

○三月三日　松崎慊堂を訪ねる。

「島田八郎左衛門（夷屋主人）来謁す」。（『慊堂日暦』六、平凡社、一九八三年、八三頁）。

○三月　『鐸舎類題集』への投稿を呼び掛ける書状刷り物に、「鐸舎執事」の一人として、九代目八郎左衛門である嶋

田正房とともに名を連ねる。「嶋田周忠」。
（管宗次「京の鐸舎の書状刷り物」、『京大坂の文人　続』、和泉書院、二〇〇〇年）。

**天保十三年（一八四二）壬寅　四十八歳**

○五月　『姉小路下ル町人別改』（袋には「天保十三寅年五月／両替町御貸地／人別改帳　四冊／御為替十人組」とあり）。
「拝借人／御為替御用達／嶋田八郎左衛門／妻ため／悴田之助／同弥三郎／娘きせ／同たね／同恵美（以下略）」。
（三井文庫蔵、続六四四四－一）
※真恵美の子弥三郎は、『平安人物志』嘉永五年版文雅の部に「源義忠　号蓮真　両替町三条北　島田弥三郎」として載る義忠のこと。

○九月七日　多病につき、隠退して職を弟与三郎に譲りたい旨、願書を提出する。
「一筆致啓上候。冷気相募候節御座候処、各様弥御安全可被成御座、珍重之御儀奉存候。然者、拙者儀、兼而相願候通、近来多病罷成、御用難相勤候ニ付、弟与三郎江御用方相譲度旨、当夏中申出、則与三郎ニも各様御面会被下、御差障も無之御承引、早速江戸表江御文通被下候処、折柄諸事御改革之砌、御勘定所御用繁、彼是御手数も相懸候義、御斟酌之趣ニ而、暫見合候様、御組頭より御沙汰ニ付、竹川氏御在府中御談有之、無是非拙者年番引請相勤罷在候所、兎角病気墓々敷無之、御用難相勤候ニ付、御殿向御勘定所之様子等相考候而、御組頭様江相歎内窺仕候処、漸御聞請も被下候ニ付、各様江御調印相願、去七日願書差出候。此度者御仲間詰合無之候ニ付、無余義三井三郎助殿江相頼候而、無滞相納申候。此段得貴意度如斯御座候。恐惶謹言。
寅九月廿八日　　嶋田八郎左衛門
　　周忠（花押）
竹川彦太郎様／荒木伊左衛門様／奥田仁左衛門様／小野善四郎様」。
（〔島田八郎左衛門御用方譲渡一件通知書〕三井文庫蔵、続二四二七－一四－八）

○十月一日　隠退と、弟への八郎左衛門名義の譲渡が承認される。

「一筆致啓上候。冷気相募候節御座候処、各様弥御安全可被成御座、珍重之御儀奉存候。然者、先便得貴意候八郎左衛門譲替一条ニ付、去月七日願書差出候所、去月晦日之夜御切紙到来、則朔日与三郎義、三井三郎助殿ニ御引廻相頼、登城仕候処、願之通御扶持方致下置、都而是迄之通被仰付、難有仕合奉存候。則被仰渡書加封仕候。此旨御通達申上度、如斯御座候。恐惶謹言

与三郎事
嶋田八郎左衛門
正房（花押）

寅十月二日

八郎左衛門事
嶋田宗二
周（花押）

竹川彦太郎様／荒木伊左衛門様／奥田仁左衛門様／小野善四郎様／猶（中略）尤手馴候迄ハ、宗二義在勤仕、為相勤可申候間、此段御承引可被下候。已上」。

（「島田八郎左衛門御用名前譲替ニ付通達書」三井文庫、続二四二七－十四－七）

○十月十五日　松崎慊堂を訪ね、隠退と帰京について報告する。

「まさに出でて光沢に詣で雑華公の墓を拝せんとすれば、島田生来謁す。留語し対飯す。為に数幅を揮し、陶集（一）、風信帖（二）を与う。晡に及んで辞去す。（中略）島田八郎左衛門。辞職して弟に付し、自ら宗二と称す。まさに京都に帰らんとして来り辞す所謂十人衆の一。大路仙助はその手代」。

（前掲『慊堂日暦』六、二五五～二五六頁）。

## 弘化二年（一八四五）乙巳　五十一歳

△九月二十一日　城戸千楯没。

**弘化四年（一八四七）丁未　五十三歳**

○十二月二十八日　中風（脳卒中）を発病する。（→嘉永元年五月十一日）

**弘化五年＝嘉永元年（一八四八）戊申　五十四歳**

○中村弘毅『閑度雑談』の序文を執筆する。「嘉永元申の歳／門人　嶋田周忠」。

○五月十一日　竹川竹斎が、病床の真恵美を見舞う。

「嶋田の周忠ぬしをも訪んと、ひる過て藤井翁ともなひていづ。（中略）かくて嶋田ぬしを訪、病の床へ逢ぬ、こぞよりはやゝゆるみぬとて、脇息にかゝりてゐ給へり。されど口吃して物*はわかず、はた心もほけて世を何ともおもはぬさまし給へり。もとの人に成事はかたくこそと思はれぬ。内君に病のことゝを問、物がたりして（以下略）」＊頭注「十二月廿八日発病／中風也」。

（『なゝそひの日記』嘉永元年五月十一日条、永井謙吉翻刻・解題「『なゝそひの日記』――竹川竹斎の嘉永元年夏の茶道行脚日誌」、『茶道文化研究』第五輯、二〇一三年三月）。

※恵比須屋一統の大路家の出身で、日蓮宗系の本門仏立講の開祖である日扇（長松清風）（文化十四～明治二十三年〈一八一七～一八九〇〉）は、真恵美の病因と病状について、次のように述べている。

嶋田宗二ハ（八郎右ヱ門）隠居黒谷ノ方丈ニシカラレテ　信者　息弥二郎（ママ）ヲ勘当セント書状ヲ認メナガラ中風トナリ口則閉塞セリ(12)

日扇は、弘化二、三年頃、真恵美の子である弥三郎義忠を、在家のまま法華宗八品門流へ入信させた(13)。真恵美は、「黒谷」すなわち島田家の菩提寺である浄土宗金戒光明寺からそのことを咎められ、義忠を勘当する手紙を書いたものの、隠退時からすでに多病であった真恵美の身には、その心労がこたえたものと思われる。

○九月　『嘉永元申年九月浄土宗門人別改帳　両替町』

「御貸地拝借／蛭子屋与三右衛門（印）／申廿七才／母　ため／申五十才（以下略）」。

※この与三右衛門は四代目で、真恵美の子田之助である。文政五年（一八二二）生まれ、明治三年（一八七〇）十

二月十日没。享年四十九。嘉永六年（一八五三）に三十二歳で病身を理由に引退し、八之助と改名(14)。

**嘉永三年（一八五〇）庚戌　五十六歳**

○三月七日　本居宣長の五十回霊祭の兼題「朝花」に出詠。また同日開催された展観会に真淵や契沖の消息などを出品。「嶋田錦華」（大橋長広編『鈴屋大人五十回霊祭歌』）。「嶋田氏蔵」として、「一　同〔荷田春満（〔　〕内筆者注以下同様）〕詠余寒月歌　懐紙」「一　真淵冨士歌（短冊三幅対）」「一　同〔真淵〕消息歌入」「一　同〔契沖〕消息狂歌入」（『鈴屋翁真蹟縮図』）。

○七月二十六日　死去。享年五十六。

**嘉永四年（一八五一）辛亥**

○七月　真恵美の子義忠が、真恵美の一周忌に「聖教御櫃」すなわち経典を入れる長持を妙蓮寺に寄進する。その蓋裏の貼紙墨書は次の通り。

「昨年初秋無六年時辞也　行年五十六才／為慈父錦華斎熹誉菊翁宗二居士／今年一周忌正当　俗名嶋田八郎左衛門周忠／本能寺八品講衆頭／嶋田弥三郎／義忠（花押）／生年二八／祖先追福家門繁栄」。

（中尾堯編『京都妙蓮寺蔵「松尾社一切経」調査報告書』大塚巧芸社、一九九七年、二九七頁）。

謝辞

本稿執筆に当たっては、資料の所在などについて牧野悟資氏および神谷勝広氏のご教示を賜った。また、神谷氏にはご所蔵の短冊の写真掲載をご快諾いただいた。記して心より感謝申し上げたい。

注

(1)　宮本又次「恵比須屋島田八郎左衛門家の経営と家訓」、『史的研究　商業経営と金融機構』（清文堂出版、一九六七年）所収、のち『宮本又次著作集』第二巻（講談社、一九七七年）所収。

（2）拙稿「恵比須屋島田八郎左衛門家の人々――『花彙』の編者島田充房を中心に」（『明星大学研究紀要　人文学部日本文化学科』第二三号、二〇一五年三月）。
（3）『有栖川宮織仁親王行実』（高松宮、一九三八年）巻末附録「歌道入門者一覧表」四頁。
（4）〔蛭子屋与三右衛門家屋敷娘たいへ譲切証文〕（京都市歴史資料館蔵古西町文書、紙焼き写真ＢＩ66）。
（5）〔蛭子屋たい家屋敷相続に付久兵衛代人請合一札〕（同文書、ＢⅡ41）。
（6）牧野悟資「『斧の響』考――石川雅望と鹿都部真顔の対立」（『日本文学』第五六巻十二号、二〇〇七年十二月）。
（7）大妻女子大学蔵。資料の所在および刊年の推定は牧野悟資氏のご教示による。
（8）小林ふみ子 "Surimono to publicize poetic authority: Yomo no Magao and his pupils", J.T.Carpenter (ed), *Reading surimono: the interplay of text and image in Japanese prints with a catalogue of the Marino Lusy Collection*.Zürich, Museum Rietberg, 2008.
（9）中尾堯編『京都妙蓮寺蔵「松尾社一切経」調査報告書』（大塚巧芸社、一九九七年）十六頁。
（10）同書、二九七頁。
（11）小林、前掲注8論文。
（12）『長松門家不離身抄』巻一（『日扇聖人全集』第十一巻、日扇聖人全集刊行会、一九六四年）。
（13）武田悟一「長松日扇における教化活動の一側面――嶋田弥三郎との交流を中心として」（『日蓮教学研究所紀要』第三六号、二〇〇八年）、および「長松日扇における教化活動の研究――嶋田氏との交流を中心として」（『宗教研究』第八二巻四号、二〇〇九年三月）。
（14）拙稿、前掲注2論文。